令和元年度

水について考える

第四十一回「全日本中学生水の作文コンクール」茨城県優秀作品集

茨　城　県

もくじ

第四十一回　茨城県優秀作品（令和元年度）

【最優秀賞】

ホタルの光　土浦日本大学中等教育学校　一年　網永（あみなが）　莉々（りり）　……1

【優秀賞】

人々に幸せを与える水のために　下館中学校　二年　藤代（ふじしろ）　かれん　……3

命の産声　土浦日本大学中等教育学校　二年　青木（あおき）　楓（かえで）　……5

期待と不安　土浦日本大学中等教育学校　一年　上野（うえの）　修司（しゅうじ）　……7

水との共存を目指して　下館中学校　二年　髙野（たかの）　滉太（こうた）　……9

【入　選】

農業を守る「ため池」の整備を　下館中学校　二年　増田（ますだ）　蓮（れん）　……11

新しい時代と共に生きる水　土浦日本大学中等教育学校　三年　内山（うちやま）　実紅（みく）　……13

私たちは蛇口をひねれば水がでる　下館中学校　二年　飯島（いいじま）　麻加（あさか）　……15

小さな取り組み　未来のために　鉾田北中学校　三年　長峰（ながみね）　利里子（りりこ）　……17

第四十一回「全日本中学生水の作文コンクール」茨城県表彰式……19
「水の日」及び「水の週間」について……20
第四十一回「全日本中学生水の作文コンクール」茨城県審査について……21

第四十一回　茨城県優秀作品

（令和元年度）

最優秀賞

ホタルの光

土浦日本大学中等教育学校
一年　網　永　莉　々

「去年は放流した三百匹のホタルの幼虫の内、四匹を成虫として確認できました。」
そう嬉しそうに語る「ビオトープを守る会」会長さんの言葉と笑顔は、未だに私の記憶に鮮明に残っている。

一昨年の夏。私は自由研究のテーマを近くのビオトープにする事にした。幼い頃からザリガニ釣りに行き、昆虫やメダカ、沢山の動植物に親しんできた。小学校でも田植えや稲刈りを経験させてもらい、ビオトープについて興味がわいていた。

私の突然の取材を、快く引き受けて下さった「ビオトープを守る会」の会長さんから、ビオトープの大切さに改めて気づかされた。また、今の日本の現状を知ることにもなった。

ビオトープでは無農薬での米の栽培を行っている。田の水はとてもきれいで、田植えの際にはタニシ、蝶、イナゴなど様々な生き物を見ることが出来た。しかし、私は疑問を持った。「なぜ、ビオトープでしか見ることがない生き物がいるのだろう。」その答えは会長さんの話の中にあった。

「他の田んぼは農薬で生き物が住むことの出来ない水が張ってあるんです。」
本来、田の生き物は食物連鎖が出来ている。ところが、人間は米の収穫量を増やすために虫たちを農薬で駆除する。農薬という毒で水田を汚してしまった。生き物は死に絶え、生命の営みの鎖は途切れてしまったのだ。

水の汚染のために地上から姿を消してしまった種がいる。今や佐渡にしかいないトキは、江戸時代、十万羽を超え、日本の空を朱色に染めた。しかしながら、平成七年にはたった一羽が残されるのみとなった。このトキは命がつきるまでケージに入れられていた。狭いケージの中で、トキたちは再び空を飛

び回ることを夢見ていただろう。農薬が多く含まれた水で育った汚染されたドジョウをトキが食べることで、トキの体は段々と蝕まれていく。水質汚染は、乱獲で数の減ったトキたちに追い打ちをかけた。日本のトキは絶滅した。

水質汚染の原因は農薬だけではない。ごみの投棄や、生活排水が水を汚す。逆に言えば私達は取り組み次第で水をきれいにすることが出来るのだ。私にできることは何だろう？捨てられたゴミが目についたら拾う。拾い続ける。ゴミが、川やビオトープの水の中に入ることを少しでも防ぐ。食事をした後の皿を、屑紙等で拭き取ってから洗えば、洗剤が減る。生涯これを続ける。そしてこの小さな行動を他者にも波紋のように広げていく。そうすれば生態系の破壊を止めることが出来るかもしれない。今、一年間に絶滅する動物は四万種と言われている。この四万種を私達は救わなくてはいけない。水を綺麗にする事で、レッドデータブックに載った多くの動物が救われるはずだ。

過去、私達人間はより便利で暮らしやすいことを理想に掲げ発展してきた。しかし、私達の発展により多くの命が地球上から姿を消した。動物たちが死に絶えた地球で、人間だけが生き残れるのだろうか？未来に私達が理想とすべきなのは、一本も雑草の生えない農地ではなく、沢山の生き物がひしめき合う田。科学で生き物を殺すのではなく、科学で生き物と人間が共存する社会なのではないか。

「ビオトープを守る会」の会長さんの笑顔の意味。それは、たった四千四百平方メートルのビオトープの中で、人の手助けにより理想の生態系が作られ、自然に命の循環が構築されたから。豊かな水と、ホタルや他の生き物が暮らしていける環境が整ったからだった。これは、環境がどうしようもなく破壊されてしまった現在でも、私達が努力することで自然の力が蘇るのだと証明してくれているのだと思う。わずか四匹のホタルが、私達に教えてくれた希望。私は希望を守りたい。

優秀賞

人々に幸せを与える水のために

下館中学校
二年　藤　代　かれん

水は私達が生きていくうえで欠かせないものであるのに、世界では蛇口をひねって安心して水を飲める国は、日本を含めおよそ十八か国しかない。この事実に驚いた。

これらをきっかけに、水に興味を持ち、昨年の夏、自由研究で水について取り上げた。普段当たり前に口にしている水。おいしい水の条件にも、様々な基準があり、日本の水道水は、１Ｌ当り、0.1mg以上の塩素が残留していなければならないと決められている。また、地域や地形によって、水の成分も変わってくるという。今、日本では水道水の他にも、国内外の天然水なども豊富に出回っている。

私は、水道水、井戸水、国内外の市販の水の硬度や残留塩素を基準値と比較し、汲み置き、沸騰させるなどの条件を変えて、味、におい、色などでおいしさの違いを調べた。

私の祖母の家は井戸水を使用している。この自由研究を行う際、井戸水に関して何も知らなかった私は、親にこんなことを聞いた。

「井戸水って不衛生なんでしょ。」

「そんなことないよ。昔から普通に日常使って、生活しているんだよ。」

普通に使って生活しているという言葉に、現在は人口増加や土壌汚染等に伴う水質汚染が問題視されているのに井戸水は本当に大丈夫なのか不安が残った。しかし、実際に飲んで調べてみると、予想していたものとは違った。井戸水も安全においしく飲めるということを知りとても驚いた。この研究を通し、私なりに水のおいしさを知ることができた。

だが、心にひっかかる点があった。世界に視野を広げてみるとどうだろうか。前にも書いた通り、安全な水を飲めるのは十八か国という点だ。同じ地球上でも、日本のように安全な水を飲める国は本当に

少ない。発展途上国を中心に水不足や水源の汚染、技術不足などによって、安全な水を飲める環境や手段がないためだ。

九億人もの人が安心して飲める水が身近になく、池や川、整備されていない井戸などから汚れた水を汲んでいる。その水汲みは、子供達の仕事であり、遠い道のりを歩いて水汲みに行くために、学校に行くこともできず、未来を奪ってしまっていることに衝撃を受けた。そして、危険な汚れた水が原因で、年間百八十万人の子供が命を落としていることにも。同じ地球上でもこんなに違うのかと胸が熱くなった。この過酷な環境を改善してあげたいと強く思う。

水は一定のサイクルで地球上をめぐっている。その水のほとんどが海水で、その中で人間が使える水は一％未満。そして、昔と今を比べても、使用できる水の量は変わらないそうだ。変わった点は、人口の増加と生活水準が上がったこと。そのため昔より私達の生活に必要な水の量は増えている。そしてこれから先も使用可能な水の量は変わらない。たくさんあるように見えても限られた水を、私達が大切に使って、守っていく必要があるのだ。

これから先、地球上の水の量と質を守っていくために私達ができることは何だろうか。

まずは、現状を知ること。これまで水についてあまり深く考えることはなかった。自由研究をはじめ、この作文の機会を通して、水の知識や地球規模で私達の水源が危機にさらされている事実を知ることができたと思う。

次に、行動に移すこと。小さなことだが、節水や川などにゴミを捨てない、生活排水に気を配るなどのことができると思う。みんなの小さな積み重ねが大きな成果をもたらすことにつながると思う。これらを実行し、水を使える環境に感謝して生活していきたい。地球のため、人類の幸せのため。そして、より良い未来を目指して。

優秀賞

命の産声

土浦日本大学中等教育学校
二年　青木　楓

五月は命が輝きだす季節だ。この時期になると、命ある全ての生き物たちが、競いあうかのように、命の産声をあげていく。

例えば、土。空から雨が降りそそぎ、地中の静かなる命の塊にそっと声をかける。すると、それらは少しずつ、命の鼓動を打ち始める。やがて、地中からやわらかな双葉を出し、産声をあげるのだ。

私の弟がまいた種子もそうだった。弟は、今年の春、小学校に入学した。小学校行事である、一年生を迎える会の中で、上級生からもらったものだ。その種子は、毎年在校生が育てたもので、種子を採り歓迎会でのプレゼントにしている。何年も前から引き継がれているもので、私が入学したときも、上級生からプレゼントされ持ち帰り、一生懸命に育てたことは忘れられない思い出の一つだ。弟は嬉しそうに学校であった事を母へ話し、早速家のプランターへ種子をまいた。弟は、毎日、毎日、庭のプランターを眺めては、お気に入りのカエルのジョウロで水をかけていた。水をかけながら、

「はやく芽がでてこないかなぁ。いつになったらでてくるんだよ！」

と話しかけていた。その姿はまるで、さるかに合戦のカニの様だった。数日後、弟は、歓声をあげた。待ちに待った、アサガオの双葉がたくさんでていたからだ。私もその様子を見て、うれしかったし、微笑ましくも思った。それと同時に、アサガオの脈々と受け継がれる命の力強さを感じ、産声を聞いたような気持ちになった。

水は生命の源である。どんな生物も、その命を育くむ為には、絶対に必要な存在であると考える。アサガオの種子は、土の中に埋めただけでは発芽しなかった。鳥や魚もそうだ。水が無ければ生きていけないどころか、子孫を増やすことすらできない。す

なわち、人間を含め命ある全ての者に、水は必要不可欠な存在であるのだ。

その反面、水には生命を脅かすほどの大きな力がある。日本中を恐怖と哀しみの渦に巻き込んだ東日本大震災。大地震が日本を襲い、その衝撃で、地面が抉れ、沿岸部では大津波が押し寄せた。木々は倒れ、建物は破壊され、人々や家畜等までも呑み込み、深く冷たい海へと引きずりこんだ。震災による死者、行方不明者は約二万人、建築物の全半壊は合わせて四十万戸を優に超えた。そして未だに避難所で生活している人々が数多くいる。私たちが住んでいる所では津波の被害はなかったものの、道路は地割れが起き、何日も停電や断水が続いた。その影響により、飲料水や食料の確保にとても苦労したと家族から聞いた。私は幼かったので記憶はあまりないが、昼夜問わず大きな揺れが続き、とても怖かったことだけは覚えている。

こういった経験を通し、自然の圧倒的な力に恐怖を感じた。更に人間の無力さを知り、人間はその力の前に成す術も無いことを痛感させられた。

人間は知恵や技術を基に地球上の至る所で大きく開発を進めてはいるが、こういった壮大な力の前には、只々無力であるしかない。人々は長い歴史のなかで、水を求め、奪い合い、争うことも多くあったが、人類を含め地球上に住む生物は、この自然によって生かされていることを忘れてはいけない。

今日も弟のアサガオは、朝露に葉を濡らし、五月の風に揺れている。

優秀賞

期待と不安

土浦日本大学中等教育学校
一年　上野修司

「いつ鮭が戻ってくるのかなぁ。」

僕の住む取手市は利根川と小貝川に囲まれていて、水に囲まれた町である。通っていた小学校から、徒歩５分もかからない場所に小貝川が流れている。

小学校５年生の十二月頃、学校の授業で鮭の卵から三～四cmの稚魚になるまで水そうで育て、二月の始めには小貝川に鮭の稚魚を放流した。小貝川は、カヤックやボート遊びもできるけど、川底は見えないし、水が汚いと僕は思う。本当にこんなところで放流して、鮭は戻ってこられるのか不思議な気持ちであった。その当時の担任の先生が、僕の疑問に答えてくれた。

「小貝川の上流には『五行川』という川が流れていて、とてもきれいな水の川なんだよ。そこには毎年鮭がそ上するんだ。」

これを聞いて僕は思った。この小貝川からは五行川のきれいさが想像できない。でも、鮭は、小貝川を確実に通って戻って来ているんだと。

二〇一五年に起きた常総市の水害のことを覚えているだろうか。この時は何日も雨が降り続き、茨城県全体にも、大雨特別警報が出ていた。そう、この常総市で決壊した川は小貝川の上流。取手市も、いつ決壊してもおかしくない状態だった。

友達の家に遊びに行った時に、僕は大きな玄関らしき場所の横で立ち止まり目を見張った。すると友達のひいおじいさんが話してくれた。

「この軒先にぶら下がっている大きな木造の船はな、川が氾らんした時に避難するためのものなんだ。この辺り一帯は何度か川の氾らんで、水害にみまわれた過去がある。」

早速、家に帰って母に話すと、今住んでいる家も小貝川か利根川が氾らんしたら、水位が四mまで達して、二階まで水没してしまうことを知った。

「えーっ！逃げ場ないじゃん。」
心の中で僕は叫んだ。そうか、だから昔からある大きな家には船があるのか。うちは、二階にゴムボートでも置いておくしかないかなぁ。
二〇一五年の九月、家族とインターネットで見られる川の水位を確認していた。いつ避難するか、この辺りの雨は止んでも、栃木県が豪雨だから、まだ油断ならない。そんな不安な状態でいた時に、速報が流れた。
「茨城県常総市で鬼怒川の堤防が決壊しました。」
住宅街や田畑は、濁流に飲み込まれていた。何もかも無くなって、ヘリコプターで助けられる人々。あの光景は自分の家だったのかもしれない。そう思うとぞっとした。翌日、小貝川の横に沿った道を車で通ると、普段水かさが少ない場所も、ほぼ満タンに川の水があった。そして数カ月たった時、家が無事残っていた人も、水が引いても臭いが取れず住むことができないという事実を知った。
ここ数年は、川に捨てられたゴミを拾うボランティア清掃に参加してみたりした。水害による臭いの原因も川にたくさん捨てられているゴミが一因なのかもしれない。でも、少しでも鮭も気分が良く戻って来られるきれいな川であって欲しい思いが強い。僕にとって、身近な川（水）は、期待も大きいけれど、災害などの不安も少しある。僕が放流した稚魚は三年～五年で戻ってくるだろうから、来年からの秋から冬にかけて、弟と一緒に見に行ってみよう。鮭くん、小貝川に戻っておいで。

優秀賞

水との共存を目指して

下館中学校
二年　髙野滉太

私が通う中学校近くの五行川は、穏やかで絶え間なく流れている。春は草花が川沿いに生い茂り穏やかで、夏は伝統の川渡御に荘厳な雰囲気が漂い、秋はサケが遡上し清らかで、冬は水鳥が遊ぶ。四季それぞれの違う姿をみせながら私達の学校生活を応援してくれているように感じる。ボランティア活動などに積極的に参加して守りたい、大切な風景だ。

２０１５年９月「国連持続可能な開発サミット」で、水と衛生が持続可能な開発をするために不可欠であることを、世界各国の首脳が公に認めた。また、迫りくるグローバルな水危機を回避するために、緊急の水対策を呼びかけ、一滴一滴の水を大切にする必要があると発表された。水が、今や世界全体での問題となっていることに驚いた。

水のない世界を想像してみる。飲水がなく、料理、入浴、トイレすらできなくなる。満腹感や衛生が保てなくなり、生活が苦しくなる。それどころか、人間の体の大半を占める水、水分がなくなっていく。植物が育たなくなり、光合成が止まり、私達は呼吸すらできなくなるのだ。

でも、蛇口をひねれば、きれいな水が豊富に出る。五行川では、釣りや散歩を人々が楽しんでいる。私達は水のない生活を経験したこともなければ、不足することすら知らない。

しかし、世界全体では水が原因となる病気や衛生面の問題が多発している。アフリカやアジアでは水が足りず、約８億４４００万人が清潔な水を利用できていない。約２３億人が適切なトイレを使えず、衛生を保てずに感染症や下痢などの原因となっている。不衛生な環境などが原因で、一分間で新生児が一人、二分間で五歳以下の子どもが一人、命を落としている。この作文を書いている時間にも、一人また一人と命を落としていると考えると心がチクチク

と痛む。

私は将来、世界中の人が平等に水と共存して生きられる地球であってほしい。水は、あらゆる生物の生命の源で、生活に欠かすことのできない存在。だからこそ、その大切さを認識し、水から与えられるだけでなく、私達人間も積極的に水を守るために行動をしなくてはならない。その第一歩として、自分の意識を大きく変えていきたい。まずは、身の回りの水について学び、考える。そして、水に支えられて生活していることに感謝し、水が限りある資源であると考えながら使用できるようになりたい。

日本の水の歴史をたどると、祖先が強い意志と豊富な知恵で守り繋いでくれたことを知った。現在の水一滴にもどれだけの人々の生きた証がたくされているのだろうか。想像してみると、水は過去から現在、現在から未来へつながる尊い存在であることが感じられる。だからこそ、現在で絶やすことなく未来へ、よりよい水をつなぎたい。ほんの小さなステップだけど、私ができる小さな行動を続けることで、これからの未来を創っていきたい。それがこれからの時代を担う私達にたくされた役目だと私は思っている。

入選

農業を守る「ため池」の整備を

下館中学校
二年　増田　蓮

私の家のすぐ近くに、勤行川という川が流れている。毎年、鮭が遡上してくるきれいな川だ。その勤行川の水が、今年の春は極端に少ない。川底の石がよく見え、コイだと思われる大きな魚が、背びれを水面から出して、泳ぎにくそうにしている。

田植えの時期になり、四月になると川の周辺に広がる田んぼには、耕すためのトラクターの音が鳴り、準備を始めている。

しかし、今年は川の水が少ないため、田植えしたくても行えず、母の職場では、

「雨がしっかり降ってくれないかなあ。」

と、困ったように話をしている人がいるそうだ。川の水が少ないと、たとえ田植えをしても水がチョロチョロとしか流れてくれず、思うように水を引き込めないという。

平成二十八年から三十年にかけても、夏に水不足になり、楽しみにしていたプールも早々と終了してしまった。今年も四月の降水量は平均の四割未満。これからも空梅雨気味で、一番取水が必要な時期に、これでは水不足が心配になってくる。

昔から、降水量が少なく、流域の大きな川にめぐまれない地域には、「ため池」が作られた。農業用水を確保するため、水をたくわえ取水できるよう人工的に造成されたもので、一年間を通して雨が少ない瀬戸内地域で多くみられ、ここに全国の六割の「ため池」がちらばっている。昔の人々が、生活の知恵をしぼって考え出したものにちがいない。

しかし、現在では、水問題は瀬戸内地域だけにとどまらない問題だ。ここ何年も異常気象が多く、ゲリラ豪雨が多く発生するかと思うと、全く雨が降らない時期もあったりで、自然の気候に頼ることの多い業種、特に農業を行っている人々にとっては、水問題は大きな課題だ。たとえ、取水ができる川が近

くにあっても、台風などで川が氾濫すれば、田んぼは一瞬にして水をかぶり、大きな被害が出てしまう。

そんな時に力を発揮するのが「ため池」ではないだろうか。

「ため池」は、水田に安定して用水を供給するための水をためておくだけでなく、大雨の時に、急に川の水が増えても、余裕があれば一旦ためておくことができる洪水調節機能もある。

約四年前、鬼怒川が氾濫した時、勤行川の一部も決壊し、隣接する田んぼに雨が流れこみ、収穫時期だった稲が水浸しになった光景を、近くの土手の上から見たことがある。一度雨水に浸ってしまった米は、価値が下がるという。これは大きな被害だ。あの時、近くに「ため池」があったなら、水を逃がし、川の決壊は防げたかもしれない。「ため池」は、取水可能な所でも、緊急事態や災害が予想される時に役立つものである。

その他、「ため池」は集落の防災用水として使用することもできるし、さまざまな生き物が住むよい自然環境となり、子供達の学習の場や、多くの人のいこいの場ともなることができる。

この「ため池」も、農業を行う人々の減少で荒れた状態のものもあり、「ため池」の決壊による災害も起きている。

しかし、雨が降るのか、川の氾濫はないのか、水不足の心配はどうかなど、農業を行う人々の不安解消の一つになる「ため池」。荒れたところは整備をし、さまざまな事態、災害を予想して、田んぼが広がる各地に一定の間隔で「ため池」を設けてほしい。ぜひ「ため池」の役割に注目してもらいたい。

それと同時に、川の堤防の整備や点検を行ったり、「ため池」ハザードマップの作成をしたり、複数の対策をすることで防災強化をし、農業を守っていってほしい。

入選

新しい時代と共に生きる水

土浦日本大学中等教育学校
三年　内山実紅

二〇一九年五月一日に新しい天皇が即位された。大きな災害はあったものの戦争のなかった「平成」から「令和」という新しい時代に幕が開かれた。

私はその日、自宅から祖父のお墓がある下妻市へと向かうため国道二九四号線を走っていた。その時、母が

「随分あの災害から復興したわね。あそこのスーパーも屋上まで水で浸っていたのよね。」

と、言ったので私もそのときのことを思い出した。二〇一五年九月十五日、茨城県常総市で鬼怒川が決壊して常総市の住宅地に濁流が流れ込んだ。豪雨が襲い、鬼怒川決壊で死者二人、三〇〇〇戸以上が浸水した。私は今でもその当時のことを鮮明に覚えている。鬼怒川の水がこんなにも恐しい水になってしまったことが信じられなかったし、「どうして？」という思いが募った。

私が住むつくばみらい市では、水道水での水源として、利根川・鬼怒川と地下水で、地下水は市内浄水場で浄化しており、川の水と地下水を混合して配水している。地下水の浄水場と川の浄水場には小学校のとき見学に行っており、川の大切さもそのとき知ったのである。そんな大切な川の水により、水害になってしまったのが私にはどうしても結びつかなかった。私の市でも鬼怒川が決壊し、避難した人も多くいた。身近な人でも家が浸水してしまい、私の母は片付けの手伝いに行った。

東日本大震災のとき、水は断水され、私は母につれられ、ペットボトルの水を買いに何軒も回り、水の大切さを知ったはずなのだ。その命とも言える水により、今度は苦しめられている人々が沢山いることに納得がいかなかった。どうしてなのか知らなくてはいけないと思い、調べてみることにした。

今回の鬼怒川流域の降水量は、二十四時間雨量五

四一ミリメートルを記録している。これまでの二十四時間最大雨量は二八九ミリメートルであったため、今回の雨量は想定を大きく超える、百年に一度の大雨だった。仮説によると、堤防の上の水が流れ、水流によって堤防上部より崩れたということだ。また、近年は林業が衰退しているため、荒れ山地が多く、多くの土砂が流れ込んでしまう。その土砂は川底にたまるので、年々川底は高くなってしまい、水が流れる面積が年々小さくなっているのだ。それも大きな原因となっているようだ。沢山の雨量や地形変化は世界的な地球温暖化により起きているものだと考えられる。

水がないと私たちは生きていけない。命でもある水を守るためには堤防を高くするだけではなく、地球温暖化への一人一人の意識も考えていかなくてはいけないと感じた。

新天皇陛下は、水関連の活動を「時代に即した新しい公務」と位置づけ、海外で行われる国際会議にも参加されている。また、長年にわたり水問題の研究者として続けられている。新しい時代と共に二度とこのような災害がないように、そして大切な水を守るため、私たちに与えられた大きな課題とも言えるだろう。地球温暖化を防ぐため、小さな私でもできることは、無駄な物は買わない。リサイクルできる物は繰り返し使い、ごみを減らす。何より命である水を大切に使うため、シャワーを流しっぱなしにしない、こんな小さいことから始めてみよう。

入　選

私たちは蛇口をひねれば水がでる

下館中学校
二年　飯島麻加

「キュ」っと蛇口をひねれば水がでます。そこから安全でおいしい水を飲むことだってできます。この水で手を洗うことも、歯をみがくことも、もちろんできます。この、日常生活の些細な行動を当たり前だと思っている人も多いのではないでしょうか。ですが、私たちは、それがあるとないとじゃ生活が大きく変わってきます。

アフリカでは、水を得るために何時間も歩き続けている人がいます。今、この瞬間もそのような人がいるかもしれません。世界には二十一億人、十人に三人が安全な水が入手できない状況にあるのが現実です。水をくみに行くのに、毎日五時間かけるという場所があります。二十四時間のうちの五時間水くみがあるため学校に行けない子たちも多くいるのです。水くみは、女性や子供の仕事のため、とても時間がかかってしまうのです。アフリカの水のない地域で水道から水が出れば、水くみに行っていた子供も、学校や友達と遊ぶことなど、自分のために使う時間ができると思います。なんとなく見ていた、『アフリカに水を。』というＣＭの意見を理解することができ、ＮＧＯの活動に、少しでも協力できたらいいな。と思いました。

ですが、世界には、水道から水が出るからといって、全て安全というわけではないのです。私は、去年フィリピンに家族旅行へ行ってきました。果物もおいしくて、海もとてもきれいでした。また水道から水もでます。が、その水道から出る水を飲んではいけない。と言われました。疑問に思った私は、理由を聞くと、おなかを下す危険があると言われました。お店で出された水や氷は水道水の水かもしれないので、飲まないように言われ、水はペットボトルの水しか飲んではいけませんでした。そんなことがあるのかとすごくおどろきました。フィリピンは、

経済格差があるため、生きのびるために、水道水を飲まなくてはいけない人もいます。不衛生な水によって病気にかかってしまう人もいるそうです。フィリピンのような、水道から水がでても、それが飲めないということは、浄化施設が整っていないことからなんだろうと私は思いました。

日本の浄化施設は、かなりすごいと思います。小学生のときに、浄水場見学に行きました。ろ過体験や薬を実際にまぜるなどの体験ができました。川や湖などの水を、ろ過し、いろいろな薬品を使ってきれいにして、水道に送る。と話をきいて、なに気なく飲んでいた水道水がたくさんの人と技術によって、安全で清潔な水として、私たちのところまで届く。ということが、とてもすごいなと思いました。

私は、この作文を通して、たくさんの事を調べることができました。アフリカなどの子供たちが、安全に安心して水が飲めるようになるには、日本としては、その地域への協力。それをするためには、個人個人が、協力して助け合うということが大切です。また水は限りあるものです。手を洗うとき、水をだしっぱなしにすると、5リットルぐらいの水が無駄になります。シャワーやせんたく、歯をみがく時など小さなことでも少し気をつければ節水になると思います。私が今できることは、節水と、募金、そして一番大切なのは、今の世界の水の現状を目をそらさず、少しずつ知っていくことだと思います。また、この現状を多くの人に知ってもらえば、アフリカなどの子供たちも安心して、水道の水が飲める日が来ることを私は願っています。

入　選

小さな取り組み　未来のために

鉾田北中学校
三年　長　峰　利　里　子

朝起きて顔を洗う。歯を磨く。トイレの水を流す。洗濯をする。ご飯を炊く。当たり前のように蛇口から水が出てくるこの日本。私たちにとっては何気ないことかもしれませんが、本当にありがたいことなのだということを、決して忘れてはいけません。私たちの生活と水は、関係し合っている、水はこの地球になくてはならない大切な財産なのです。

私はインターネットで、水について調べてみました。するとその中に、「水源かん養」という言葉を見つけました。その言葉にはどのような意味があるのか、どういったものなのか興味を持ちました。更に詳しく調べてみると、水源かん養とは、雨水を吸収して水源を保ち、あわせて河川の流量を調節するための森林のことだということを知りました。更にその森林には水質浄化も含まれているらしく、「なんだこの森林、すごい」と感動しました。自然を利用して水質浄化までしてしまう。森林なので、私たちに全く害がない。むしろ地球温暖化の抑制などにもつながるといったメリットがたくさんあると考えます。とても素晴らしいことだと思いませんか。水を私たちの手で守ろうとする取り組みが行われていることに、とても嬉しく思います。

しかし、そんな簡単に解決することはできないのが今の現状です。他の国では、水が充分に確保できていないという問題があるようです。「私たちには関係ない」なんて、決して思ってはいけません。同じ地球に住んでいる人類として、お互い手をとり合ってサポートしていくべきだと私は思います。実際、私たちの国でも水不足は起こりうるのです。決して油断してはいけません。もしかすると明日、蛇口から水が出てこなくなってしまう、なんてことも起こりうるのです。そのような事をこの先防いでいくために、私たち一人一人の取り組みが大切になってき

ます。お皿を洗う時はこまめに水を止める。洗剤の量を考えて使う。お風呂の水を再利用する。私たちの小さな取り組みも、みんなでコツコツ積み重ねていけば、水を守る活動につながっていくはずです。この作文を読んでいるあなたも、私たちと一緒に取り組んでいきましょう。将来の地球や自分に、きっとプラスになるのではないでしょうか。一緒に頑張っていきましょう。

個人の取り組みも大切ですが、やはりボランティア活動などを通した水を守る取り組みも大切だと思います。先ほどの「水源かん養」を生かした森林を守ったり、増やしたりする。近年話題の植林をボランティア活動として一般の方が気軽に参加できる場を、今より定期的につくる、など、より現実的な活動も大切になると思います。私も、身のまわりでそういった活動が行われていたら、参加してみたいです。

私たちに欠かせない資源「水」。考えなおしてみると、改めて水というものの重要さ、尊さを強く実感しました。安心して水が使える今の生活に感謝して、自分にできることに進んで取り組んでいこうと思います。

第 41 回「全日本中学生水の作文コンクール」
茨城県表彰式

日　時　　令和元年 7 月 26 日（金）　午前 10 時 00 分から
場　所　　1801 会議室

受賞者の皆さん

「水の日」及び「水の週間」について

昭和52年５月31日
閣　議　了　解

水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性について国民の関心を高め、理解を深めるため「水の日」を設ける。

「水の日」は毎年８月１日とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、ポスターの掲示、講演会の開催等の行事を全国的に実施するものとする。

上記の行事は、地方公共団体その他関係団体の緊密な協力を得て行うものとする。

「水の日」及び「水の週間」制定の理由

わが国の水需要は、生活水準の向上、経済の進展等に伴って近年著しく増大してきたが、一方水資源の開発は次第に困難になっており、渇水時には水不足が生ずることが予想される状況となっている。

このような状況にかんがみ、毎年８月１日を「水の日」とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」として、この週間において、水資源の有限性、水の貴重さ及び水資源開発の重要性に対する関心を高め、理解を深めるための諸行事を行うことによってわが国の水問題の解決をはかり、もって国民経済の成長と国民生活の向上に寄与することといたしたい。

なお、諸行事を行うためには、年間を通じて水の使用量が多く、水について関心が高まっている８月の上旬が適当であるので、その初日である８月１日を「水の日」とし、この日を初日とする一週間を「水の週間」とするものである。

第41回「全日本中学生水の作文コンクール」茨城県審査について

1　募集要領

（1）趣　旨

「水の日」及び「水の週間」の行事の一環として，次代を担う中学生を対象とした作文コンクールを実施することにより，広く水に対する関心を高め，理解を深める。

（2）テ ー マ

水について考える（題名は自由）

（3）対　象

令和元年度に県内中学校，中等教育学校１～３年次及び義務教育学校７～９年次に在学中の者

（4）応募締切

令和元年５月８日（水）

（5）原稿枚数

400字詰原稿用紙４枚以内

2　応募状況

（1）応募総数

260編

学年別　　１年　159編　　２年　67編　　３年　34編

（2）応募校

５校

筑西市立下館中学校，水戸市立笠原中学校，鉾田市立鉾田北中学校，水戸市立第一中学校，土浦日本大学中等教育学校

3　審　査

（1）審査方法

予備審査を通過した作品について，茨城県審査会（令和元年5月28日実施）で審査を行い，最優秀賞１編，優秀賞４編，入選４編及び学校奨励賞１校を選定した。（学校奨励賞は筑西市立下館中学校）

また，入賞した上位５作品について，国土交通省で行われる中央審査に推薦することも併せて決定した。

（２）審査基準

①　優秀作品

テーマ「水について考える」にふさわしく，日常の生活体験や学習を通じて得られた内容で，次の基準を満たすもの。

・水の貴重さ，水資源開発の重要性などが適切にとらえられていること
・将来の夢，提案等が中学生らしくまとめられていること
・抽象的，観念的なものでないこと
・字句の正確さや，文章の構成がよくできていること

②　学校奨励賞

当コンクールに積極的に参加していること

（３）審査委員

委員長	阿　部　　重　典	（(株)茨城放送取締役編成局長）
委　長	武　藤　　秀　明	（茨城新聞社編集局報道部参与）
〃	鈴　木　　優　子	（茨城県教育庁学校教育部義務教育課指導主事）
〃	飯　村　　信　夫	（茨城県土木部河川課長）
〃	三　富　　健　史	（茨城県政策企画部水・土地計画課長）

４　表　彰

（１）表彰式

令和元年７月26日(金)　県庁1801会議室に於いて実施

（２）賞及び副賞

最優秀賞	（茨城県知事賞）	１名	賞状，副賞（図書券）
優　秀　賞	（茨城県知事賞）	４名	〃
入　　選	（茨城県知事賞）	４名	〃
学校奨励賞	（茨城県知事賞）	１校	賞状

茨城県

茨城県政策企画部水・土地計画課
〒310-8555　水戸市笠原町978番6
電話　（０２９）３０１－２６２５
http://www.pref.ibaraki.jp/